

# 甲冑堂

泉鏡太郎

青空文庫



橘たちばな南なん谿けいが東遊記とういうきに、陸前国りくぜん荻田郡かたごほり高福寺かうふくじなる  
 甲冑堂かつちうだうの婦人像ふじんざうを記きせるあり。

奥州おうしう白石しらしいしの城じやうか下かより一里半南いちりはんなみに、才川さいがはと云いふ駅えきあり。此この才川さいがはの町末まちずゑに、高福寺かうふくじといふ寺てらあり。奥州おうしう  
 筋すぢ近來きんらいの凶作きようさくに此寺このてらも大破たいはに及び、住持ぢうじとなりて  
 も食物しょくもつ乏とほしければ僧そうも不住すまず、明寺あきでらとなり、本尊ほんぞんだに  
 何方いづかたへ取納とりおさめしにや寺てらには見みえず、庭にはは草深くさみかく、誠まことに  
 狐梟こけうのすみかといふも余あまりあり。此この寺中じちうに又一またつの小堂せうだうあり。  
 俗ぞくに甲冑堂かつちうだうといふ。堂だうの書附かきつけには故将堂こしやうだうとあり、  
 おほきわづかにけんしはうばかりのせうだう小堂せうだうなり、本尊ほんぞんだに右みぎの如ごとくな  
 大おほき纒きに二間四方許にけんしはうばかりのせうだう小堂せうだうなり、本尊ほんぞんだに右みぎの如ごとくな

れば、此この小堂せうだうの破損はそんはいふ迄までもなし、やう／＼に縁えんにあが  
 り見るみに、内うちに仏ほとけとてもなく、唯婦人たゞふじんの甲冑かつちうして長刀ながなたを  
 持ちたる木像もくざう二つを安置あんちせり。これ、佐藤次信さとうつぎのぶ忠信たけのぶ兄き  
 弟やうだいの妻つま、二人ふたぬ都よこにて討死うちじにせしのち、其その母はの泣悲なきかなし  
 むがいとしきに、我わが夫をつとの姿すがたをまなび、老おひたる人ひとを慰なぐさめた  
 る、優やさしき心こころをあはれがりて時ときの人木像ひともくざうに彫きざみしものなり  
 といふ。此この物ものがたり語ことばを聞きき、此この像ざうを拜はいするにそゞろに落ら  
 くるあ涙なみだせり。(略りやく) かく荒あれ果はてたる小堂せうだうの雨風あめかぜをだに防ふせ  
 ぎかねて、彩さい色しきも云々うん／＼。  
 甲冑堂かつちうだうの婦人像ふじんざうのあはれに絵ゑの具ぐのあせたるが、遙はるけき大お  
 空ほぞらの雲くもに映うつりて、虹にじより鮮明あざやかに、優やさしく読よむもの、目めに映うつり

て、其その人ひ恰あも活いけるが如ごとし。われら此この烈はげしき大都会だいとくわいの色しき  
 彩いを視ながむるもの、奥州おうしゅう辺へんの物もの語がたりを讀よみ、其その地ちの婦人ふじんを  
 想さう像ざうするに、大おほ方かたは安達あだちヶ原はらの婆ば々々を想おもひ、もつぺ穿はきたる  
 想さう像ざうするに、大おほ方かたは安達あだちヶ原はらの婆ば々々を想おもひ、もつぺ穿はきたる  
 姉あねえをおもひ、紺こんの禪ふんの媽ど々しか、あ  
 る、宮城野みやぎのと云いひ信夫しのぶと云いふを、芝居しばいにて見みたるさへ何なにとやらむ  
 初はつ鰹かつの頃ころは嬉うれしからず。たゞ南なん谿けいが記ししたる姉きやう妹だいの此こ  
 の木像もくざうのみ、外そとヶ浜はまの砂漠さばくの中なかにも緑オアシス水オアシスのあたり花は菖蒲あやめ、  
 色いろのしたゝるを覚おぼゆる事こと、巴ともえ、山吹やまぶきの其それにも優まされり。幼おさなき頃ころよ  
 り今いまも亦また然しかり。  
 元げん禄ろくの頃ころの陸奥むつち千鳥ちどりには——木川きがわ村むら入いり口ぐちに鐙あぶみ摺ずりの岩いは  
 あり、一いつ騎立きだちの細道ほそみちなり、少すこし行ゆきて右みぎの方かたに寺てらあり、小高こたか

ところ、堂一字、次信、忠信の両妻、軍立の姿にて相  
 き所、堂一字、次信、忠信の両妻、軍立の姿にて相  
 ひなら  
 双び立つ。

軍めく二人の嫁や花あやめ。

また、安永中の続奥の細道には、——故将堂女体、

甲冑を帯したる姿、いと珍らし、古き像にて、彩色の剥げて、

下地なる胡粉の白く見えたるは。

卯の花や威し毛ゆらり女武者。

としるせりとぞ。此の両様とも悉しく其の姿を記さざれども、  
 一読の際、われらが目には、東遊記に写したると同じ状に見

えて最と床し。

然るに、観聞志と云へる書には、  
 齊川以西有羊腸、維

れいしげんく、あしをかみ、ひづめをやぶる、いつかうはんなり  
 石巖々、嚼足、毀蹄、一高坂也、是以馬憂※

これをもつて存る春きをねむれおぼつがいゆる、くわんざんこえがたきもの、まさにご  
 隕、人痛嶮艱、王勃所謂、関山難踰者、方是

れにおいてかしんいすべし、どじんやれあぶみのさかとしようす、やれあぶみさかのひがしに  
 乎可信依、土人称破鐙坂、破鐙坂東有

いちどうあり、なかにちよえいをおく、みにじふいふくをつけ、かしらにえぼしをいた  
 一堂、中置二女影、身着戎衣服、頭戴烏帽

子、右方執弓矢、左方撫刀劍とありとか。

此の女像にして、もし、弓矢を取り、刀劍を撫すとせむか、

いや、腰を踏張り、片膝押はだけて身構へて居るやうにて姿甚

だどゝのはず、此の方が真ならば、床しきは半ば失せ去る。読む

ひと々も、恚くは筋骨の逞しく、膝節手ふしもふしくれ

立ちたる、がんなの娘を想像せずや。知らず、此の方は或は画

像などにて、南谿が目のあたり見て写し置ける木像とは違

へるならむか。其その長なが刀持なたもちちたるが姿すがたなるなり。東遊とういうぎ記なるは相違さうゐあらじ。またあらざらむ事ことを、われらは願ねがふ。観聞くわんもん志しもあやまし過あやまちたらむには不都合ふつがふなり、王勃わうぼつが謂いふ所ところなどは何どうでもよし、心こころすべき事ことならずや。

近頃ちかごろ心こころして人ひとに問とふ、甲冑堂かつちうだうの花はなあやめ、あはれに、今いまも

咲さけりとぞ。

唐土たうどの昔むかし、咸寧かんねいの時とき、韓伯かんはくが子某なにがしと、王蘊わううんが子某なにがしと、劉り耽うたんが子某なにがしと、いづれ華胄くわちうの公子等こうしら、一日あるひ相携あひたづさへて行ゆきて、土地とちの神かみ、蔣山しやうざんの廟びやうに遊あそぶ、廟びやう中ちう数婦人すふじんの像ぎやうあり、白はくせ皙きにして甚はなはだ端正たんせい。

三人さんにん此この処ところに、割籠わりごを開ひらきて、且かつ飲のみ且かつ大おほいに食くらふ。其その



ひと無げなる事、恰も妓を傍にしたるが如し。剩へ酔に乗じて、  
 三人おのく、其の中三婦人の像を指し、勝手に撰取りに、  
 おのれに配して、胸を撫で、腕を押し、耳を引く。  
 時に、其の夜の事なりけり。三人同じく夢む、夢に蔣侯、  
 其の伝教を遣はして使者の趣を白さす。曰く、不束なる女  
 ども、猥に卿等の栄顧を被る、真に不思議なる御縁の段、祝  
 着に存ずるもの也。就ては、某の日、恰も黄道吉辰なれば、  
 揃つて方々を婿君にお迎へ申すと云ふ。汗冷たくして独り  
 づゝ夢さむ。明くるを待ちて、相見て口を合はするに、三人符  
 を同じうして聊も異なる事なし。於て蒼くなりて大に懼れ、  
 齊しく牲を備へて、廟に詣つて、罪を謝し、哀を乞ふ。

其その夜よ又また俱ともに夢ゆめむ。此この度たびや蔣しやう侯こう神じん、白しろ銀がねの甲冑かつちゆうし、

雪ゆきの如ごとき白馬はくばに跨またがり、白羽しらばの矢やを負おひて親したく自しみづから枕まくらに降くだる。白しろ

き鞭むちを以もて示しめして曰いはく、変へん更がへの議ぎ罷まかり成なりらぬ、御身おんみら等ら、我わが処む

女すめを何なにと思おもふ、海老茶えびちやではないのだと。

木像もくざう、神しんあるなり。神しんなけれども靈れいあつて来きたり憑よる。山深やまふか

く、里幽さとゆうに、堂宇だうう廃はい頽たいして、愈いよく活いけるが如ごとく然しかなり也なり。

# 青空文庫情報

底本：「新編 泉鏡花集 第十卷」岩波書店

2004（平成16）年4月23日第1刷発行

底本の親本：「桜草」文芸書院

1913（大正2）年3月18日

初出：「新小説 第十六卷第六号」春陽堂

1911（明治44）年6月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「甲冑堂《かつちうだう》」となっています。

※初出時の署名は「泉鏡花」です。

※初出時は「一景話題」の総題で、「夫人堂」「あんころ餅」

「夏《げ》の水」とともに発表されました。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 甲冑堂

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>